

## 最近の萬葉集翻譯

幣原道太郎

海外に於ける日本研究は戦中戦後を通じて漸く隆盛に趨きつゝあり、就中、アメリカに於て目覚ましく、今それを日本文学の分野に就いて見ると、畏友ミシガン大学教授ヂョウゼフ山極越海氏がエドウィン・ライニャサマー(Edwin O. Reischauer)氏と協力出版した「古代日本文学選訳」(TRANSLATIONS FROM EARLY JAPANESE LITERATURE) (1951) のやうな好著も上梓せられ、その中で堤中納言物語の英訳否外国語訳が初めて完成した(Waley の抄訳)事は喜ぶべきことであり、又、ワシントン大学教授マツキンソン君(Richard N. McKinnon)がハーヴァード大学へ提出した学位論文「世阿彌芸術論研究」(Zeami on the No: A Study of 15th Century Japanese Dramatic Criticism) の要項を一見するも相当真摯周到な心構へが窺はれ、殊に、遊樂習道風見の英訳を附載したのは驚くべき努力と云はざるを得ない。又英国に於ても久しく休刊中のロンドン日本協会の戦後復興版とも云ふべき亜細亞協会会報が刊行せられ、毎々時を同じうして上智大学の日本文化誌叢(MONUMENTA NIPPONICA)の戦後版第一巻が出、日本紹介に重大な役割を演じようとして居る。今こゝでは戦後我国で出版せられた萬葉集翻譯史上注目すべき二つの業績に就いて少しく論じて見たい。

抑も萬葉集の海外紹介の歴史は相当古く、その翻譯も少なくないが（詳しくは新村出博士の萬葉枯葉參照）、從來その雙璧とも称すべきは、和蘭人 J. L. Pierson J. R. 博士の THE MANYŌSHŪ（既に第五卷まで出版済）（1929）と日本學術振興會編刊の萬葉集選訳（The Manyōshū 1940）とであり、共に英訳であつて、前者は萬葉集各卷を一冊づつにまとめた完訳で語学的正確を第一義とした學術的な研究でその成果は稍文學的な香りに乏しい嫌ひはあるが、最初の完訳として注目すべく、後者は小畑薫良、石井白村兩氏の分擔訳で原歌の選択や現代語訳が現代萬葉学会の諸權威の手になるものであり、訳文も美はしくて恐らく今日到達し得る最高の業績であらうが、惜しむらくはそれが選集に過ぎない為め、この偉大な世界的文芸作品の全貌を海外に紹介し得ないのである。

さて、こゝに論じたものは左の二種の翻譯である。

Kenneth Yasuda : Myriad Leaves (The Manyōshū). 1949.

Robert Vergez : Anthologie du Manyōshū. 1949.

安田健氏のもは萬葉集全英訳を目指すもので未だ第一卷（萬葉卷一の全部）が刊行せられたに過ぎず、その続刊が鶴首待望せられ、ヴェルヂェーのは萬葉の百首を選択し仏訳したものである。萬葉集の仏蘭西訳は英訳に比して質量共に劣り、その中でも Léon de Rosny, Michel Revon Georges Bonneau のものが注目せられるが、翻譯せられた原歌の数に於て、又、独立の書冊の形式を採つて居る点で、ヴェルヂェーのものは劃期的とも云へよう。安田氏には既に Halcyon Interlude, A Pepper Pod, Laquer Box など著作があり、殊に百人一首の英訳 (Poem Card) はすぐれて居るが、今度の翻譯もその副題に記されてゐるやうに萬葉集の全訳を二十冊にまとめ、原歌の格調を存しつつ訳筆を運び、それに原歌とローマ字書きの原歌とを添へたもので、斎藤茂吉博士の序文にも記されてゐる通り、原作の精神と調べを伝へんとしたもので、訳者自身も、此の翻譯をして意味、精神、格調に於て出来得る限り原作に忠実ならしめ、以て東西兩洋の文化的理解を深めんとするものであると言つて居る。

次にヴェルヂェーの仏訳萬葉選集は Jacques Chazelle の萬葉集概説とも云ふべき緒論を附し、矢張り、原歌並びにローマ字書きの原歌に翻譯を対照せしめ、卷末には註、皇統略譜、参考書目其の他を添載してある。以下両書を比較しつつ、一、二の原歌に就いて少しくその翻譯の技法を検討して見よう。なほピエルソンや日本學術振興會の翻譯をも併せ考へることとする。（なほ原歌とその解釈は便宜上武田祐吉博士の萬葉集全註釈に拠つた）

萬葉集卷第一

雜歌

泊瀨朝倉宮御宇天皇代 大泊瀨稚武天皇

天皇御製歌

(一)

籠毛與 美籠母乳

布久思毛與 美夫君志持

此岳爾 菜採須兒

家吉閑 名告紗根

虛見津 山跡乃國者

押奈戶手 吾許會居

師吉名倍手 吾已會座

我許背齒 告目

家呼毛名雄毛

(安田 訳)

Book One

Miscellany - Poems

In the Reign of His Majesty who Ruled

At the Asakura Palace at Hatsuse

Emperor Ohatsuse Wakatake (Yuryaku)

Imperial Ode

(1)

Your basket - sweet basket - in hand

Oh, your trowel – pretty trowel – in hand,  
Maiden, plucking greens upon this hill-side,  
Where's your home?—I ask; tell me what's your name  
In the spacious lovely land of Yamato  
Over everywhere I am the one who reigns;  
Over everything I am the one who rules.  
I myself, indeed, will tell you  
Of my home and of my name. \*

\* The last two lines are read by some scholars as follows :  
“ I myself, indeed, tell you this.  
Tell me of your home and name. ”

(本<sup>ナ</sup> 歌<sup>カ</sup> 一<sup>一</sup> 編)

Rencontre (1)

Votre corbeille, avec votre jolie corbeille,  
Votre pelle, avec votre jolie pelle,  
Sur ce coteau, cueillant des herbes,  
Jeune fille, où est votre gîte?  
Dites – moi votre nom !  
Au Pays de Yamato, très étendu,  
Je règne souverainement, je gouverne puissamment.  
Moi – même je vous parlerai, entant que votre maître  
Et de mon gîte et de mon nom.

卷末の Notes et Observations を看ると、

Ce nagauta a été composé par l' Empereur

Yuryaku qui régna de 456 a 471.

とある。

先づ安田氏の訳について言ふと、原歌の「布久思毛與 美夫君志持」をフグシモヨ ミフグシモチ、「吾已會座」をワレコンマセと読み、武田博士は夫々、フクシモヨ ミフクシモチ ワレコンワレと読んでゐられる。「家呼毛名雄毛」を *le womo na womo* (*le omo na omo* が正しい) と綴つてゐるのが目につくが、本文の美籠母乳のミは接頭語で、好愛の情を表はして居るとすると、それを *sweet* と訳することは妥当と思はれるが、次の美夫君志持のミも同様だとすると、それを強ひて別語を以て訳する必要もないやうに思はれ、兎も角 *pretty* ではないさうか原意に副はぬやうに感ぜられるし、*Oh* の文字もなくも済まされるやうに思はれる。布久思を *trowel* としたのは、それが *scoop* 又は *shovel* を意味する限り、聯想は異なるが、大体に於て適訳であり、「家吉閑」のナは希望を表はすものであるから *I ask* だけでは物足らず、「名告紗根」のネは他に対する希望の意を表示する助詞であり、またノラサは動詞告るの未然形に敬語の助動詞スの接続したものとすれば、兩者を勘案して、*please* か *will you* でも附加してはどうであらうか。「虚見津」はヤマトの枕詞であり、この大和の起原説話に基づく言葉には広漠たる意味に加へて莊重味を帯びてゐるから *spacious* よりもつと雄大な訳語が望ましく *lovely* はなくもがなの冗語と思はれる。「押奈戸手」  
 「師吉名倍手」のナベテに *over* の文字を使用したのはまことに原意をつくし得て遺憾なく「押奈戸手吾許會居」と「師吉名倍手吾已會座」の対句的用法も亦移し得て巧みである。「我許背齒」の心持も *myself*、*indeed* の二字によく出てゐる。なほ訳註は「目」を「目」に作つた類聚古集などの説を指すかと思はれるが、然りとすればノラジを意訳したものであらう。

以上概説した通りによると、部分的には不充分と思惟される箇所もあるが、訳歌全般を通じて見ると、如何にも流麗で、翻譯に伴ひ勝ちな生硬にして直訳的臭味なく、読者は宛然英語の原詩を読んでゐるやうな氣持がする。そして原歌が短句に發し、長句に移行し、いまだ五七調の定型に固まらない、自由な調子を帯び、かつ対句的用法が多いこ

ともよく翻譯に写し出されてゐる。そしてシラブルの數もなるべく原詩に近づけようとする貴き努力が窺はれるのが頼もしい。ところで他の英訳を参照して見よう。ビエルソンは次の如く訳してゐる。

O basket, bearing a fine basket,

O bamboo spade, holding a fine bamboo spade,

O girl picking (gathering) herbs on this hill.

Let me know your house, O and let me know your name.

The land of Yamato (Seen from the Heavens),

powerfully arranging it (uniting the land), it is I who live there.

Spreading my power over and arranging it in order (governing the country), it is I who sit (reign, am) there.

It is me whom you must call "husband".

Your house! your name! (let me know them).

この逐語的解説的な散文的翻譯と対照すると安田氏の英訳の巧みさがしみじみと痛感せられる。もとよりビエルソンは翻譯の外に評語、文法、文字、異訓などの項目を設けて詳細に論じ、かゝる学究的態度は安田氏には缺けて居るが、すべては翻譯そのものを中心として考へるべきであらう。

次に日本學術振興会版の英訳萬葉集は

Your basket, with your pretty basket,

Your trowel, with your little trowel,

Maiden, picking herbs on this hill-side,

I would ask you : Where is your home ?

Will you not tell me your name ?

Over the spacious Land of Yamato,

It is I who reign so wide and far,

It is I who rule so wide and far.

I myself, as your Lord, will tell you

Of my home, and my name.

となつて居て as your Lord の有無の如き原典解釈の相違に基づく字句の異同はあるが、安田氏が此訳を参照せられた事が窺はれ、こゝにも學術振興会版英訳萬葉選集の卓越さが立証せられるが、原文への忠実さに於て両者を比較すると一長一短であるが、安田氏の軽妙な格調には味ふべきものが多い。

最後にヴェルチェー氏のは假に「邂逅」と題し、矢張り、學術振興会版を參看せられたらしく、仏蘭西語のなだらかな語調が遺憾なくその特徴を發揮して居る。「美籠母乳」のミは矢張り英語の pretty に當る joliette を以てし、「布久思」は pelle (= shovel) とし、英語の trowel に當る truelle を用ひなす。「菜」は振興会版同様 herbe の文字を使用して居るが、安田氏のやうに greens (仏語 verdure) の方が良くはなからうか。又、「菜採須兒」も殊更 jeune (若く) を附さなくともよかるべく、「押奈戸手」や「師言名倍手」は簡単な副詞を以て修飾してあるが、どうも原文の力強い表現が充分移されて居ない憾みがある。振興会版の as your Lord に當る處は同く意味の maître を使つて居る。今一首例に引くと、

山上臣憶良 在大唐時 憶本郷作歌

(空) 去來子等 早日本邊 大伴乃 御津乃濱松 待戀奴良武

安田氏の訳は

A Poem Composed by Yamahoue no Oni Okura on Thinking, while in China, of his Homeland

(63) Back to Yamato,

comrades, let us hasten now,

for the beach pine-tree

Of Mitsu of Otoro

waits for us so longingly !

訳筆流麗、原歌の内容を伝へ得て余す所がない。「去来」を *now* とし、「待戀奴良武」のヌラムが「確かにさうであらう」と推量する語法であるのを、現在形 *wait* を用ひて簡潔に表現し、その意味を補足し、且つ原歌とシラブルを合はせるため *so longingly* の二字を加へたことも妥当であらう。たゞ「子等」の「子」が若きもの又は部下に対する親しみの詞で、こゝでは舟人従者等を総括したものとすれば *comrades* の語を以て之を表はすことはどうであらうか。然し、船出をした土地の濱松を挙げて、それに対する思慕の情を、逆に松の側から見待ちこがれてゐるだらうと歌つた原歌の気分は巧みにこの訳詩に表はされ、又、その五七調もこのまゝこゝに移されて居る。そこでビエロンンの英訳を見ると、

Come, companions ! Quick to Yamato !

The pine on the beach of mitsu (minding of the heroic Ootomo clan),

will wait impatiently for us.

となつて居り、「子等」は安田氏と同じやうな詞 *companions* を用ひ、安田氏が「御津乃濱松」の「濱松」一語と見て居るのに対し、ビエロンン氏は「濱」を「御津」に掛けて解し、「大伴」を地名とせず、氏族名と看做して居り、さうして「御津」を註して The place name, homophone of (mitsu), (mitumisus), valiant, heroic as the Ootomo clan と記してゐる。この解釈は同大く卷二、六六、六八の両首の英訳についても言へる。そも「大伴」は大坂湾に面する一帯の総名であり、そこに大伴氏の本居があつたのが此地名の起りだとすれば、大伴氏との関係もあつては相違ないが、さうして上記の英訳はいかゞかと思はれる。次に日本學術振興会版の英訳萬葉選集を看ると、

Thinking, while in China, <sup>1</sup> of this homeland

Come, my men, let us hasten to Yamato !

The shore pines on Mitsu <sup>2</sup> of Otomo <sup>3</sup>

Must wait and long for us.



- 1 Okura was a member of the embassy to China, which left Japan in the 2 nd year of Daiho (702) and returned home in the 1 st year of Keiun (704)
- 2 An old name for the port of Osaka.
- 3 The general name for what is now Osaka and its vicinity.

となつて居つ「子等」を my men, 「濱松」は安田氏のやうに一語と解し、「大伴」も矢張り地名とし、又、「待恋」を「待」と「戀」に分離し、「奴良武」は must を用ひて断定的にしてあるなど慎重な配慮が窺はれるが原歌の格調を忠実に写してゐる点では安田氏の一筆を輸するやうと思はれる。

最後にヴェルモレーを引く。

Retour

Venez mes enfans,

Hâtons-nous vers Yamato !

Les pins sur la plage de Mitsu

En Ôtomo

Nous attendent et nous désirent.

なほ此仏訳では Ce tanka a été composé par Yamano no Okura pendant son séjour en China. とする註が附してある。「子等」は children と my enfans を用ひ、「待戀」は振興会版のやうに「待」と「戀」を分離して訳出して居る。

以上は輓近の日本文学海外紹介の一例に過ぎないが泰西、殊にアメリカに於ける日本研究熱は筆者の聞知せる限りに於ても驚くべきものがあり、一時的狂熱と看做すには余りに真摯にして徹底的であつて、戦後の我国に於ける西洋文化謳歌と奇しき対照を見せて居る。我等の文化、就中、芸術の分野に於ては世界に誇示するに足る勝れたものも存在するのであるから、今後我国が文化国家として世界に貢献するためには、日本文化の海外紹介に一段の努力と熱意を傾けるべきであらう。